李白孤傳

八

2501
10-8

貸本 展銀
北邨芳
遠 2501 10-8

阿也可之物語巻之八

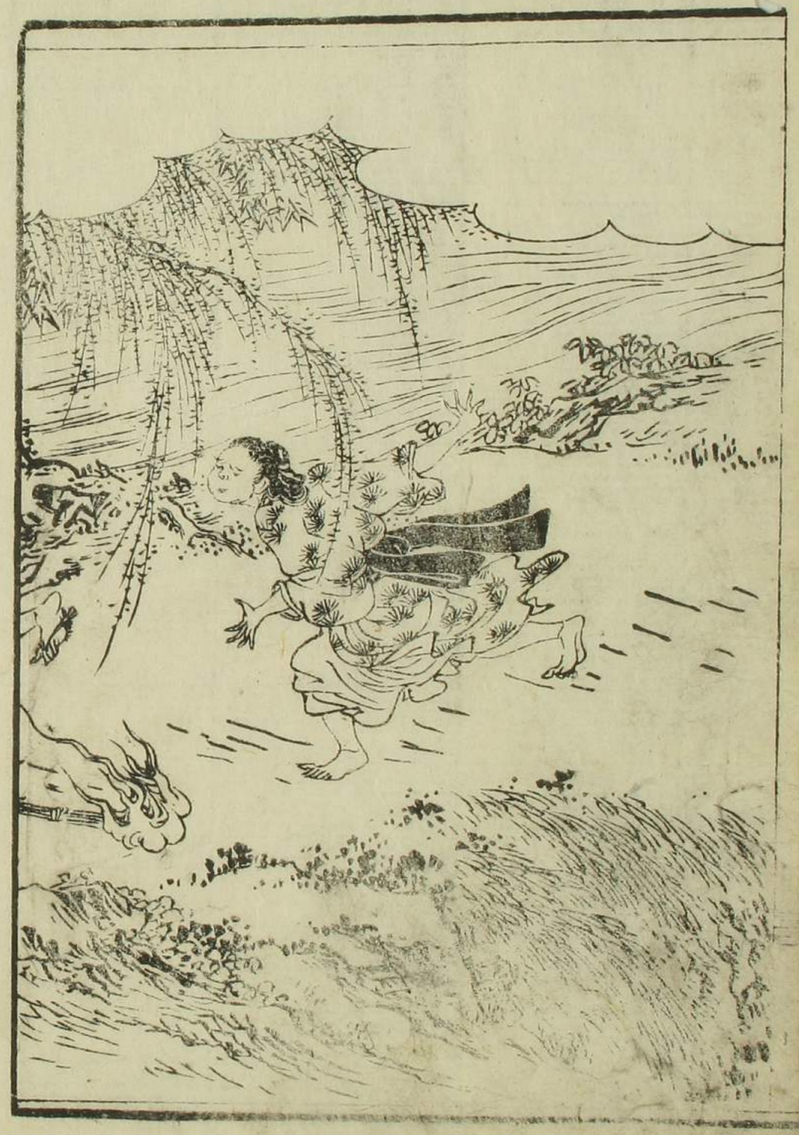
法橋玉山戯作併画

農夫九郎安奈夫婦をもてる物語

安信野出左ぶ家の合壁に九郎といふ百姓獨身にて住ける
農夫なれども大和の産なりしが頃此郷に徙て
来て隣をもとめ安奈夫婦と家を建て彼も此
もの多き比親族なりぬれば互に
親しく交りわ此九郎身の長七尺ばかり

金玉縣下大伏郡
年早村毎日三番地
千摺柿太郎
北村重男

醜婦安奈之纏ノ



山を接。威猛粮のごとし。偖も安奈ゞ此里より帰アるに、
しばらく程ゝ人もあるれハうみゝゞ。美麗妻のうゝ
を惜もおりゝゞ。機嚴。因幡。安奈ゞ名ハ命ハのハいとお
もふ気色のうゝ。家富つの村ゝ。花よ時と歳
ゝゝと。邑中のゝゝ。ゝ杉のゝ。ゝ。おりゝ居
ゝ。須臾。陽生の季。安奈河内の國富因の郷よゆゝ
あるゝゝ其ゝゝ。遠梅の時ハわゞよ咲ゝゝ。
春の景色の深あれゝゝ。此所彼所花見あわゝ。

ゝゝも山の端よ蔭ゝゝ。傍よ人あゝゝ。道邪
ゝゝよ平野乃荘ゝゝ日ハ暮ゝゝ。晴れば好
需ゝ苗代植ゝ畴ゝゝ。ゝよ横ゝゝ。ゝゝ安倍
野ゝも程ゝゝ因の中よ小川の流ゝあり。此河端よ女
人ゝゝ居ゝ。道ゝゝ此河の流ゝ。ゝ。
ゝゝ陽ゝ付ゝゝ。安倍野の郷ゝ
ゝ十五郎ゝ妻ゝ。安奈殿ゝ。何者ゝ恐ゝ
ゝ女のゝ往来ゝ。十五郎よゝ

せしや。口説けるが声すれてあらはれしかぞそへ。八御主乃
こよ。首の葉の額よこそ最愛い文字の角や生えん。川
みのかへしる飛越の石をはらひ。河をこえし堤を汀
らの女郎し安奈が手をとらへ。出んとしも面づせなれど。月
出る頃は須悪しつひしよ。宵ろして舞くりしぞ。出雲の
神のたぐひまして切つなりのまくへ絵べしいふ安奈
魂をうしし。あらけしきびのいひしや。悪をとるも人まど
とくれど。擲退し逃さりら。理なれ此女。顔の色かへしれど

以てくく眼まろく。鼻ひしげ。額高くさし出。赤き髪のちゞく
縮まつく宮ろよ肉よく肥しく膨ふくれあるぞ。五大力士の妻とやいふ
まじ。倩女腹あしく憤つてくぐ云ぬ前ゑて立名も思へ。霜をまたぐ
ぐ尾花が原の穂をいざ初し我思ひ。さしまで無かりくよ
いかゞせし。裾まくりつ。袖まくり。放ハやらじと捩ぢかかり。
安奈は唯雷神の落くる如恐しく。叔せし窓すでまとし
逃ゆくよ。拒火消し時かへりし堤の京村荊かかうて
棘に倒されし。倒ころぶおそろし助まやうやうし

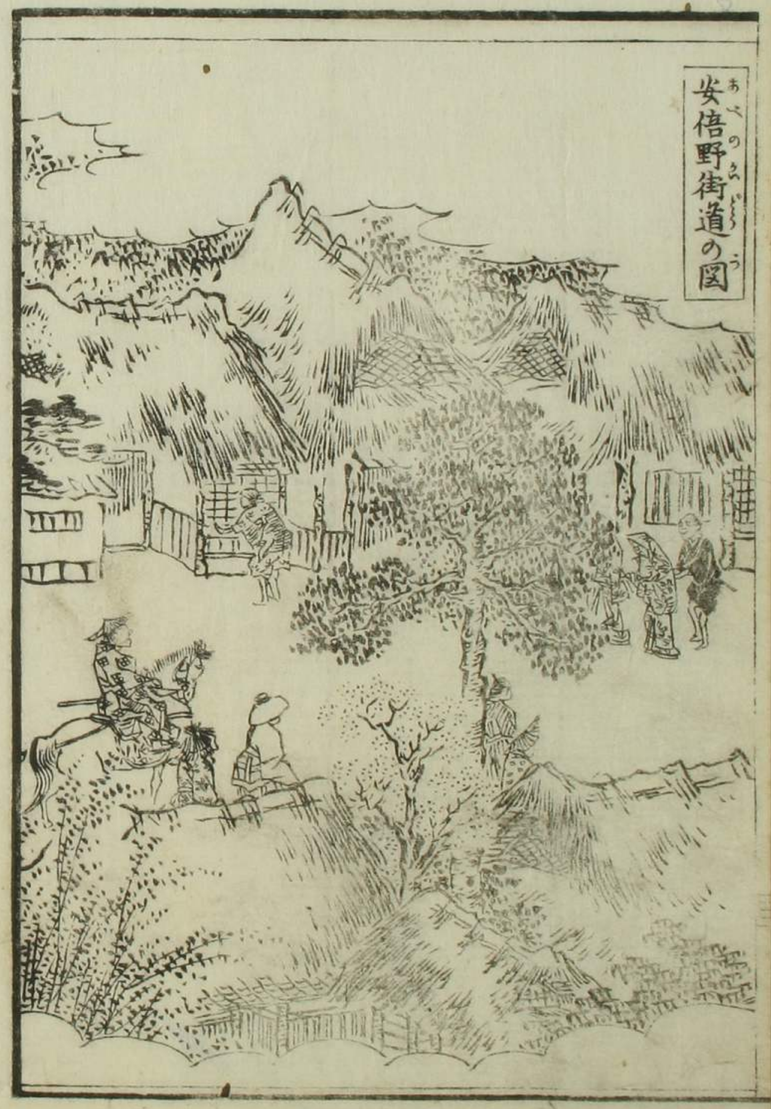
九郎が怪力鄉畫を服し

嘑ぶに、松明手ごとにふり照し。農夫五六人来かゝりしが。
先に進みたる男は此醜婦が丈夫十五郎なれ。女房を扨措き
我夫よりも来かゝりしが。この安奈乃人非人、妾に戯想じかけし。さ
はづかしめせつるに。訶責て腹居させまてしかるに安奈既
び魂を飛し。これ思ひよらばのかなかしぞや。情身なりて家
に怨恵ばなし。清れ成まよりあつたるれなつかし。幾気し
きひとしいへども十五郎いよ〳〵怒りて安奈が髻掴んで引倒し。
泥足にて強く踏つけ。人も多かれ。安倍野邑によろの

おぼせかゝりし。十五郎夫婦を揺覚し。家前に引きつれ責て
云は。おのれ先より安奈が後につきまとひ。むしろ終の形勢を見れば。
汝容貌の醜きをも恥じ。安奈に慶ひるを。蛇蝮と恐るに
まかせ汝返りて安奈に悪慕されしと偽りて胸ひらり
し。汝等皆心を合せ安奈を殺に引入んとの謀計とな
謀ゆれば。只今一人ものこらび打殺し。餘の人乃らの害を
除くべし。と其所に生たる柳樹の切株に諸手をかけ。一
引によひきぬきたるに。其根四方へひろがりて四尺がら。

大地震ふ。堤も既に崩れ家倒れあんとす。抑誰人か是をおそ
れざらん。農夫原地に額をとり。あを合を敷させ給へ
淀とりくる中に十五郎が妻震の恐しく新荒まれ神
の安奈を護ふまふ八ちぐ巧を振へるおのれが罪の深
重ふるおろかなる。人を恵むる仰慮よませ給ひしう
助七郎のこゝろ。此後安奈が為いらんよ因前等掘水を
火焚野山を走る。海河を渉る寒ことゆる恵もまるるる
夏の日中も園情裏燃しく股あぶり如何なる勤りも

厭ずもし嘆くゆるさせ給へ。大都しく注ぎ
されば安倍野の村中八さしく此時遠近ちくへく安奈
夫婦を暗議をるりのあきて。まる所る男女おとれをるのし。
あを気怪や。用あるまりしく九郎が力弱を觸んとや。此
所におくバ連及ぶやあひめしんして。逃去る者るもどりや
怨歌安奈が手裏を隠るるの詠
五月雨の晴間なく。打濕るるで。袖をさハちくく頃
なれ早苗を田毎の小笠をとるの陰ふぬるでをかゝ仰


安倍野街道の図

さしづれのころ乙女等の手つとひすがれて田植るなど。歌仙の
名ハはづかしも。早乙女としてただ忍びしく関出ましし番とられ
長三が媼。嫁殺しの權作婆。阿仙。阿満も名ハ女なれど。饒
子の器に飯うづく盛りて。ちわしうまさげ。唇ひろく開く。
員も志らじ食らうまじ満なん。おさし男の及ぶべきかは
足が井に立つらく。首の葉が累々るあり。さ満ろし。歌人
のことばにも賤しくいやしかれ。さる業に馴し身るも
あらねバ。家に居つらく糧食の調へしまて。人のいてじ。主に

よ勤しんれ志らしれが為りけのなれ農夫の妻乃が力を携とくい
耕作に精夏バ最愛夫子もぞ。く飢ゑや着ぬらんとて。絹
うちて羅をと戴き田の雨に出て冬ハ月を荷ふて家に帰つ。此
年月寒さ気にるを凍し暑さは面を曝ちくも雪ろ
と同じ肌のうるみ露も集るころ。て。弥益に艶あらで
世の中も不思議のおなくと怪むものもいで来るなり。五月の
雲清田植の外るすとく。住吉中の人多ければ。此
野の街道にハあるハ賣酒壚。或ハ餅に商ふ茶屋一所せく連

躍りしこそぞ。聖主の御代の例ありがたく侍りし時
ぞかし。人の面もうまじと編笠ふかく被りて武夫四人是も
さとくしの帰りさかりかくへ。見りの躍験りしハ。沽酒を
やうしもうしし。月ハ西の方に落ちく暮ちかくなりしも昔の
夢ハおもかげに童る懐よ抱くく戸の口を往還人を見
るに。此武夫主ぞ。遠見。近見。足入れしが中に一人つと
寄りく。昔の夢がたりをひしくと。若ぞ侍居ハ此所にやと
いふ。昔の夢ふんづくあとくと。振捨くさを入れ

此日安奈が召仕ふ下僕等住吉に詣でゝ四方出く。安奈天狗
戸の内のよう瞿麦を拵く居らしく。昔の夢がさを入る形おか
ありしくに。ゆるくと出る。門の戸外よりおし開くの
武夫ハもうくしとはいりく。安奈仰天しあぐ目の角をく
何者ぞ。案内もなくかぶりを望しあぐ押入れくと。あわてゝ
夫なれど安倍野安奈が住むかぶくに。不祥なる事しと拒くた
るハ。先勇くしく。南くと。一人の武夫是を聞く。瞋きて
出太刀引抜。安奈が胸ぢくし捕く押ふせくり。昔の夢抱

ら童子を板敷なげはふり投棄てひらめき投刀ひらめき跳
落し九郎はおらんとすれども出合まとに奉ひらめき咤ばらし
よ壁隅よ應じ答へ例の九郎つと入来り武夫の腕
首捕へ引被て庭の隅なる窠のもとへひゝ蛛のごとく投
付ひらめきはゆるまじと殘りし三人咤投連切ふせ九
郎大あをひろげ電光の如く走出て飛入と見しが抜る
白刃をぎらつかしと跳落して細首肩骨ちゝ
引掴んぐるまとひしと投付腰骨のほゝをひしと踏

天地の情に逆ひ人に仇なすの輩なりとて
の物語あり九郎もとより命の秋泉の國司
二郎高保加茂の館に保憲を殺害せし家
老百舌の敦茂ひそかに清原一家の人々歯を咬むぐり憤
りぐる何者の仕業なるをきびし刹主に糺ぐるもぐり
しに上の御しきもよろしうびの接の國司高
浄ハ二郎が父にあらば此敵需ひゆく首提げ来つ
うぶかはれ。たちまちバ國の四往来ゆるしし以の外乃
気色なり。敦茂ひそかに此怨討遂ごんバ狭ようる
ものもあり國司尋ぬるとそれぞれ知りあるを
ども。頃ようより東北天皇田の邑よりあるべき飢
を助くべきかつぐもあり。進ず退く道も絶ち。此の
ほりにある告る者あり。ゆえの月彼所よりゆきて敦
茂ものもおのれも同じ陽の仇ちりを合ぐたづひ出
し。永く怨みをなるうんとは無の饉来ようり。今と
はるごと付る。今西徒蒋が出のぶゆよりられしこう天の

貸本 尾銀

賚あれ。郭ふが手〳〵。先捻非違使の廳より引ゝ〳〵。再び詰め〳〵明白に。彩の伍。父母の怒を討めるべ。清原の人〳〵。武夫の制も全〳〵。郭夫婦が者の瑠璃〳〵ていづくもしらでこがんいうまおびしやといふよ。九郎も。葛の葉ふも宝ものもべるも閑くさもべ〳〵。安奈は天皇岡より往〳〵。清原の人〳〵をいうまく。僕は此恵徒おをやて待べしとらめよ。安奈〳〵ろ〳〵ひるる鞋ひ〳〵。松明ろ〳〵し。天皇岡へいろ〳〵ろ

怪可志譚巻之八 終

貸本 尾銀